後鳥羽院の良経評

――「後鳥羽院御口伝」私注（四）――

福田秀一

「後鳥羽院御口伝」の良経評は、良経の歌風を論ずる際にしばしば引合ひに出されて著名であるが、その解釈は必ずしも明確になつてゐないやうに思ふ。特に、最近古写本を調査して本文にも問題があることを知り、従来の解釈への不審を強めたので、その点を報告して大方の御批判を受けたい。

例によつて、慶大図書館蔵頓阿奥書本を底本として漢字仮名を適宜改め、宮内庁書陵部蔵三条実量書写本（宮）・静嘉堂文庫蔵本（静）・同松井文庫本（松）・古語深秘抄本（古）・群書類従本（類）・歌学大系本（系）の諸本による校合の結果、主要な異同を注記すれば、左の通りである。便宜上、文の初に番号を付しておく。

(一) 故摂政は、たけをむねとして、諸方をかねたりき。(二) いかにぞや見ゆる詞のなさ（宮、なさけ、他の諸本、なき）、歌(注)ことに由あるさま（宮、さまに）、不可思議なりき。百首(三)などのあまりに地歌もなく見えしこそ（宮・静・松・類・系、ぞ）、かへりては難ともいひつべかりしか（諸本、し）。秀歌(四)あまり多くて、両三首などは書きのせがたし。

（注）この「こ」の清濁は解釈の上に重要な問題であるから、後に採り上げることとし、暫く濁点は打たないでおく。

右に引いた通り、「御口伝」の良経評は四つの文から成つてゐるが、この中解釈に問題があるのは「いかにぞや」に始る(二)の文である。一体、右の一節はしばしば引用されながら、その意味を明確に解説もしくは口訳したものは、あまり多くない。管見に入るところでは、久松潜一博士「新古今集と新古今歌人」（弘文堂刊『日本文学史 上』二二五頁）・同博士『新古今集』（アテネ文庫）四九頁（『中世和歌史論』一

○九頁も同じ）・田中新一氏「良経」（『国文学』昭三二・九）・山崎敏夫氏「藤原良経」（『日本歌人講座3、中世の歌人Ⅰ』）位である。

これら諸氏の所説はほぼ一致してゐるやうで、久松博士は㈠・㈡の部分の本文を、前著では

故摂政はたけをむねとして諸方を兼ねたりき、いかにぞや見ゆる言葉のなき、歌ことによしあるさま不思議なりとし、後著では

故摂政のたけをむねとして諸方を兼ねたりき。いかにぞや見ゆる言葉のなき歌、ことによしあるさま、不思議なり

としてをられるが、その解釈は両著ともほぼ同じで、アテネ文庫本によれば、

たけあるといふのは率直な点を認められたと思はれ、「いかにぞや見ゆる」言葉がないといふのは、定家の技巧的な表現を好まれなかつた御態度から、良経の真率な態度を認められたと思はれる。

と述べてをられる。田中氏も、㈠・㈡の部分を、

故摂政はたけをむねとして諸方を兼ねたりき。いかにぞや見ゆる詞のなき歌ことによしある様不可思議なりき。

と引用した後に、

いたずらに巧緻をこらさずして目立たぬ洗錬された詞で率直に詠み出した良経の和歌の趣深い様を指摘したものであろうか。

と、疑問を残しつつ推測してをられ、最近出た山崎氏の論攷には、㈠から㈣までを全部引用した上、㈠・㈡の部分を要約解説してあるが、㈡は本文を

いかにぞやみゆることばのなき歌ことによしある様不思議なりき。

として、それを

表面平凡に見える歌であつて、深い味わいのある歌があることを言つている。

と述てをられる。

右三氏の解釈は、相互に多少の相違はあるかと思はれ、特に「いかにぞや」の語義の認識など必ずしも一致してゐないやうでもあるが、久松博士の解説には稍々私の理解及ばぬ点もあり、田中氏は控へ目に推測として記してをられるに過ぎないので、結局現在までの通説は、最も簡明に述べられた山崎氏の論によつて代表させてよいであらう。

ところが、先般来私は、㈡の文をこのやうに解することに若干の不審を抱いてゐる。それを以下に披瀝したい。

問題点はいくつかある。順に挙げれば、㈠「いかにぞや」の語義、㈡異文「なさ」・「なさけ」・「なき」のいづれを採るべきか、㈢注を付した「こ」の清濁、即ち「歌殊に」か「歌ごとに」か、及びそれと関連してこの前後の構文と「不可思議なりき」の主語は何か、等の諸点である。これらにつき、逐次検討して私見を述べる。

一、「いかにぞや」の語義

「いかにぞや見ゆる詞のなき」の部分の解釈について前記三氏の論攷を見ると、久松博士は、「技巧的な弊に陥らなかつたことを仰せられたものと思はれる」(『日本文学史 上』)とか、「定家の技巧的な表現を好まれなかつた御態度から、良経の真率な態度を認められたものと思はれる」(アテネ文庫『新古今集』)とか述べてをられ、「いかにぞや」の語を技巧的な表現に結びつけて解してをられる一方、良経にさういふ語法のないことを院が称揚してゐることをも確認してをられる。「いかにぞや」が褒貶どちらの意を有するかについての博士の御見解は必ずしも明確ではないけれども、前著の叙述によれば非難の語と解してをられるやうで、それならば右の二点については私も大体従ひたいと思ふ。

次に田中氏は、前述の通り控へ目にではあるが、「いたずらに巧緻をこらさずして目立たぬ洗錬された詞で率直に詠み出した」と述べてをられ、「いかにぞや見ゆる詞のな」いといふ事実に対する院の評価については久松博士説と同様であるが、「いかにぞや」の語自体は、どちらかと言へば褒めことばと解してをられるやうに思はれる。その点、山崎氏の所説はもつとはつきりしてゐて、「一見平凡に見える」と言ひかへてをられるが、恐らくこれは、「いかにぞや」を、気の利いた言ひ廻しとか秀句的表現とかいふ意味の、褒めことばととつてをられるのであろう。

しかしながら、それは「いかにぞや」の語句の解釈としては誤と言はなければならない。「いかにぞや」又は「いかにぞ」の語は、新古今時代を中心として歌合判詞にしばしば見えるが、現代語の「どうかと思はれる」と同じで、あまり賛成できない気持を表す際の語と決つてゐる。岩波文庫『歌合集』から例を示すならば、次の通りである。

(1)中宮亮重家朝臣家歌合(顕広判)

右歌は、末句いかにぞやことたらぬところある心地すれど……(花三番、右歌は弁の「又さかむ春に心のかゝらずは散りゆく花に身をやかへまし。」なほ、この歌合の判詞には「いかにぞや」が頻出する。即ち、花の十二番・十三番、郭公の九番・十三番、雪の十番・十四番等に見え、恋十番の判詞には「いかにぞ」の用例もある。)

(2)広田社歌合(俊成判)

左歌、姿心は優に侍り。末の句の詞続きぞいかにぞや。さらでもと聞え侍。(海上眺望二十番、左歌は季広の「島隠れ見えみ見えずみ行く舟の果は雲居に消えぞしにける。」)

(3)右大臣家歌合(清輔判)

左歌、させる事なくや。裏返すなど侍るもいかにぞや聞ゆ。(落葉六番、左歌は隆信朝臣の「散りしをもあはれと聞きし紅葉ばを又裏返す風渡るなり。」)

(4)御裳濯河歌合(俊成判)

今夜みかさのとおける詞は、優に聞ゆ。ふりさけしとい

へる初の句やいかにぞ聞ゆらん。（十番、対象は右の「降りさけし人の心ぞ知られける今夜みかさの月を眺めて」、なほ、廿一番の判詞にも「いかにぞ」の用例がある。）

(5)宮河歌合（定家判）

右の歌も、詞たくみに心をかしく見え侍るを、末の句やなべての歌には猶いかにぞきこゆらん。（三番、右歌は「若菜おふる春の野守にわれなりてうき世と人につみ知らせばや。」）

(6)遠島御歌合（後鳥羽院判）

左右共に同じ程なれども、右の歌の末の句、いかにぞや聞ゆ。仍以左為勝。（二十番、右歌は如願法師の「今も猶昔や恋ふる橘の花散る里になくほとゝぎす。」）

右の如く、「いかにぞや」又は「いかにぞ」は、表現や語法があまり感心できない時の評語で、強い非難ではないにしても、褒と貶に分ければ貶に属することは確かであり、従つて「いかにぞや見ゆる詞のな」いといふのは、特に称賛した評ではないにせよ、表現や語法に難がないことを認めた言である。つまり良経の表現が穏健であるといふことを言つてゐるのであつて、それは比較的多くの場合、巧緻の度が過ぎて奇矯に走つた、いはゆる「詞のいりほが」な欠点がないことを指すとも見られようが、必ずしもさういふ面にのみ引き寄せて解さなくてもよく、良経の表現や語法には難点がなかつた、といふ広い意味の賛辞と見るべきではあるまいか。

二、「なさ」・「なさけ」・「なき」の異文

ここには三通りの異文があつて、しかも古写の有力な二本がそれぞれ独自異文をもつてゐるから、少々厄介である。「御口伝」の全体について異文を集計して諸本の系統を推定し得たならば、原形の推定も或いは可能かも知れないが、現在のところそれを果してゐないので、根拠の乏しい推量を試みる他ないけれども、慶大本の「なさ」が正しいのではないかといふ気がする。その理由を以下に述べる。

先づ、慶大本の書写状態から見て、少くとも同本の筆写者は、「なさ」であることを確信してゐたらしく思はれる。「さ」は、先づ紛れることなき字形（現在の平仮名と同字形）で書かれてをり、しかも次の「歌」で新しく墨つぎをして筆を起してゐる。即ち、筆写者は「なき歌」と続くやうに理解してゐたのではないことが明かである。これは注意すべきことと思ふ。

ところで、この本の筆写者は不明である。古筆了佐の極めには冷泉為秀とあるが、先づ信じがたい。漢字と仮名の相違もあるけれども、定家自筆本「近代秀歌」の奥書や為秀真蹟の「詠歌之大概」（『弘文荘善本目録』所載）等と比べると、同じ筆者と見るのは困難なやうである（但しいづれも写真又は複製による比較）。しかしながら、頓阿がその奥書に「或仁ニ誂ヘテ書写セシメ」たと記してゐる点から推して、頓阿の知己であつたことは確かであり、かかる依頼を受けたので

あるから、歌道にさほど暗かつた者とも思はれない。そして又、恐らく頓阿は書写の出来栄えを一見したであらうと思はれる。従つて、もしそこに不注意な誤写があれば訂したであらう。それをしてゐないことから考へて、多分右の「なさ」は頓阿の校閲を通過したものと思はれる。かく、筆写者と、そして恐らく頓阿と、二段の保証を得てゐる本文には、相当の信頼を置いてよい、といふのが理由の一半である。

もう一つの理由は、本文転訛の一般論として、「なさ」から「なき」と誤る方が、その逆よりも可能性が大きいと思はれることである。「なさ」は語法として稍特殊であり、耳遠い言ひ方であるのに対し、「なき」の方は、そこで連体中止法とするにせよ、連体修飾格として「歌」へ続けるにせよ、遙かに落着きがよいことは確かである。かういふ場合の一般例としては、難解から安易へ移るものであつて、その逆ではない。この法則の教へるところと本文の古さとの一致する今の場合は、「なさ」を原形と認めるのが穏当かと思はれる。書陵部本の「なさけ」は「なさ」が難解なために衍字として「け」を讒入したものであるに違ひなく、「なき」が原形であつたとしたら、それが「なさけ」と転訛する可能性は殆んどないであらう。（因みに、書陵部本は三条実量が「弱年之昔」即ち十八才の時に禁中で後花園院宸筆の本を書写しておいた本により、文明十三年六十七才になつて「衰老之今、披見之処、書写誤有之、仍書改之、但猶不審事等有之」と言つてゐるものである。）

なほ、右とよく似た事例として、家隆評の一節に

秀歌ども詠み集めたるおほさ（静・古、おほき、松・系、おほかた）、誰にもすぐ（静、すぐれ、松・系、すぎ、古・類、ナシ）まさりたり。

とある「おほさ」の異文を挙げておきたい。即ち、ここでも慶大本・書陵部本及び類従本が「多さ」としてゐるのに対し末流諸本は「多き」・「大方」等としてゐるのである。この中、「大方」は無理と思ふが、「多き」ならば文意は通る。しかし古写二本の一致は無視しがたいとすれば、ここにも「形容詞語幹＋さ」から「形容詞連体形」へといふ転訛が行はれたことになり、後鳥羽院の語法を近世の書写者が十分理解できなかつたための誤写がこの両箇所に現れてゐるものと見て、これを共通に処理できるのではあるまいか。

以上の諸点から「なさ」の本文を原形と認めたいとは思ふが、「いかにぞや見ゆる詞のなさ」といふ言ひ方が稍特殊で耳遠いことは事実であり、慶大本以外では、書陵部本の「なさけ」を除いて、調査した諸本がすべて「なき」としてゐる点と併せて、「なき」を軽卒に否定できないやうにも思はれる。ただ静嘉堂本以外の諸本は系統不明であるが、全体の書写状態から見て、かなり末流のものと認められるから、やはり「なさ」を一応優位に置いて次に進みたい。

三、「歌殊に」か「歌ごとに」か

併せてその前後の構文と「不可思議なりき」の主語

「歌ことに」は右二つのいづれかであると思はれるが、そのどちらとすべきかについて考へてみたい。

従来は「歌殊に」と解されてきたらしく、歌学大系本は「こ」に濁点を打ってゐないし、田中新一氏「良経」（前記）もさうである。峯岸義秋博士の『歌論歌合集』には、「歌、殊に」と漢字を当てた上、「歌」の次に読点を打ってあるが、石井直三郎氏「後京極良経」（『水甕』昭八・一）・川田順氏「後京極摂政良経」（『新古今集の鑑賞』所収）・谷山茂氏（『新古今の歌人』一一五頁）等も「歌、ことに」としてをられる。久松博士は、「新古今集と新古今歌人」（前記）では「歌ことに」とし、『新古今集』と『中世和歌史論』では「歌、ことに」として、構文の把握に違ひを見せてをられるが、「ことに」に関しては両著共「殊に」と解してをられるのであらう。

しかし、これは果して「歌殊に」でよいのであらうか。前節の考察が十分な結論に到達してゐないので、「なさ」と「なき」との両本文についてそれぞれ考へてみたい。

先づ、「なさ」の本文に従ふならば、「いかにぞや見ゆる詞のなさ」の句は次の「歌こ（又ハご）とに由あるさま」の句と対等になつて、「不可思議なりき」の主語となる。即ちこの構文は次の二つのいづれかであることになる。

いかにぞや見ゆる詞のなさ、
歌殊に由あるさま、　}—不可思議なりき。…（a_1）

いかにぞや見ゆる詞のなさ、
歌ごとに由あるさま、　}—不可思議なりき。…（a_2）

（注）—の上は主語、下の「不可思議なりき」はその述語。

この場合、（a_1）は果して意味をなすであらうか。良経の歌風を評するに当つて、「歌殊に由ある」などと抽象的な表現を用ゐるのは、特に「歌」などと言ふのは、いかにも不自然であつて、論旨を構成しにくいと思ふ。（「歌」の語がなければ、一応評の体をなすかも知れない。）しかるに、（a_2）ならばよく意味が通じ、良経を褒めてゐる院の語としては、極めて当然ととれるのである。

次に、「なき」の本文に従ふ場合は、

いかにぞや見ゆる詞のなき歌、——殊に由あるさま、——不可思議なりき。……（b_1）

いかにぞや見ゆる詞のなき歌ごとに由あるさま——不可思議なりき。……（b_2）

いかにぞや見ゆる詞のなき、
歌殊に由あるさま、　}—不可思議なりき。…（b_3）

いかにぞや見ゆる詞のなき、
歌ごとに由あるさま、　}—不可思議なりき。…（b_4）

（注）—（b_1）は主語・述語の入子型構文。「夏ノ寒イノハ不思議ダ」の類。（b_2）は単純な主語＋述語の構文。

の四通りが考へられ、（b_3）が不自然なことは（a_1）と同様である。

（b_1）はどうかと言ふと、前記の通り従来は殆んどこの解

釈が行はれてゐたやうであるが、私はそれに従ひがたい。前に触れたやうに、それは「いかにぞや」を褒めことばととつたための誤と思はれる。もし「いかにぞや」が褒めことばであるならば、「特に気の利いた語も使つてない歌——山崎氏によれば一見平凡に見える歌——が、（それにも拘らず）特に味ひ深いやうなのは、驚くべきことであつた」といふ意味になつて具合がよいけれども、第一節に述べた通り、「いかにぞや」には、さういふ意味用法はない。従つて、（b_1）をとれば、「どうかと思はれるやうな（奇異もしくは不適当な）語法のない歌が、特に味ひ深いやうなのは……」といふ意味になるわけであるが、それでは評の体をなさない。「殊に」の語を大して重く見ないならば、表現の穏当な歌がすぐれてゐることは或る意味で当然であつて、少しも「不可思議」ではなく、それを院が良経の長所としてゐるのは変であるし、もし「殊に」を重視するならば、単に無難な表現に過ぎない歌を「殊に由あるさま」と言ひ、それを「不可思議なり」と評するのは、これ亦不自然である。つまり、（b_1）の解には無理があることを認めなければならない。

（b_2）のやうに読んだ場合もほぼ同様である。この場合、語法的には（b_1）と多少異るけれども、表現される内容としては結局似たやうなことになり、事実として不合理不自然になることは（b_1）と同じで、この解も採れないことになる。

しかるに、（b_4）をとるならば、（a_2）と同様に、少しの矛盾もなく文意がよく通り、院の良経評として十分納得が行くのである。つまり、「なさ」・「なき」いづれの本文をとるにしても、構文はそこで一旦中止法となつて、そこまでの句と「歌ごとに由あるさま」とが対になり、その両句が「不可思議なりき」の主語になつてゐる、と私は思ふ。

以上、繁雑に亘つてしまつたが、問題の文は、「いかにぞや見ゆる詞のなさ（又ハき）、歌ごとに由あるさま、不可思議なりき。」と読むべきで、大意は、「どうかと思はれるやうな不適当な語法や表現がなく、そしてどの歌も深い趣があるやうなのは、驚くべきことであつた」といふことになると思ふのである。そして、かかる院の評は、現存する良経の歌を通観するとき、いささか称揚しすぎてゐる感はあるにしてもほぼ承認できると思はれる。当時の評価を見る一法として、歌合における判詞を見ても、ごく稀には、

左歌、新玉のなどおかれたる、一番のつがひと覚え侍るを、下句の御酒給ふなりといへるや無下にただ詞に侍らん。（六百番歌合、釈阿判、春上一番、元日宴、左持、「新玉の年を雲ゐにむかふとて今日もろ人に御酒給ふなり」）

左歌、（中略）今日とさせる煙何事ぞや 。（同、春中十一番、野遊、左負、（武蔵野に雉も妻やこもるらん今日の煙の下に鳴くなり））

左歌を、右申云、上に詠こしとをきて、下にみせぬといへる、同心の病か、いかん、（中略）判者申云、左歌姿

宜けれども、ながめの詞うたがひ有。（新宮撰歌合、釈阿判、二番、霞隔遠樹、左持、「ながめこしおきつ波間の浜ひさき久しくみせぬ春がすみ哉」）

の如く、「いかにぞや見ゆる詞」について非難されたものもあるが、それは現存する良経の全歌数から云へば極めて微々たるものであつて、院の評が当つてゐないといふことにはならないと思ふ。従つて、問題の部分は前述のやうに解してよいと考へるのであるが、この点御批判頂ければ幸である。

附記 ㈠「後鳥羽院御口伝私注」の㈠―㈢は、『解釈』誌の本年三～五月号に連載した。本稿と共に、『歌論集・能楽論集』（日本古典文学大系65）の校注で、久松博士をお手伝ひした際の副産物で、紙数の都合で論証を簡略化し、もしくは省いた同書の頭注や補注を補ふものである。

㈡ 『解釈』三月号所載「後鳥羽院御口伝」私注㈠において、「左近の桜の詠」は従来良経の「誘はれぬ」の歌を指すと解されてきたと述べた（一五頁上段）が、それは私の軽卒に基く誤であつた。樋口芳麻呂氏から御教示頂いたが谷山茂氏が『新古今の歌人』（二五〇頁）に、「年を経て」の歌を当時の定家が自讃しなかつたと述べてをられるし、樋口氏御自身も「続二四代集攷」（『愛知学芸大学国語国文学報』第三集）で小島博士説を否定して「左近の桜の詠」は定家の「年を経て」である旨論証してをられるとのことである。樋口氏の「続二四代集攷」は手近なところになくて拝見できなかつたが、殆んどそのままを再説されたといふ『定家八代抄と研究下』の解説（一二六頁）は、かつて拝読してゐながら、前稿執筆の際失念してゐたのであつた。又、その後披見の機を得た石田吉貞博士「新古今歌風の分裂」（『学苑』昭三六・一）にも、私見と同様の説明がある。以上の如く、「左近の桜の詠」を定家の「年を経て」の歌と解してゐる論攷も確かにあり、拙考はそれら先学の説を繰返したに過ぎないのであるが、一方未だに良経の「誘はれぬ」の歌の如くに解した論攷をしばしば目にするので、その誤であることを強調しようとした余りに、重大な見落しや失念をしたことについて、先学並びに読者諸氏のお許しを頂きたくお願ひする次第である。

㈢ 同じく「後鳥羽院御口伝」私注㈠に述べたところの中、「事がら」の語の解釈については、安田氏の御見解を多少誤解してゐたやうにも思はれ、氏の御意見は拙考と殆んど一致するものと考へてよいやうである。このことを氏よりの御書信で知り、私の至らぬ誤解について安田氏及び読者諸氏のお許しを乞ふと共に、拙稿の終にも述べた通り、後鳥羽院や良経達と定家との歌観とその違ひとについての説明・指摘は、氏の両著に初めて明らかにされたことであつて、私もそれを支持したに過ぎないことを、念のため申添へたい。従つて、後者の点のみならず、「事がら」の語義についても、拙稿は安田氏の説を支援することになるならば幸と思ふのである。

(四) 『解釈』四月号所載「後鳥羽院御口伝」私注(二)に慈円の歌を載せる文献を挙げた際、若干書き落したものがあるので、この機会に補っておきたい。いづれも「二四代集」にとられた歌である。

1「二四代集 冬」　3「二四代集 釈教」　4「二四代集 雑中」　7「二四代集 羇旅」

(五) 同誌五月号の「後鳥羽院御口伝」私注(三)で、「平懐」の語が歌論においては一般に用語・発想の平凡陳腐なものを言ふことを指摘して、峯岸博士が前田家本「伊呂波字類抄」の付訓「なめし」を採って「無礼」の意としてをられるのを「誤である」と断定したが、これも撤回したい。その後考へ直した結果、博士の説も有力な一案と思ふやうになった。歌論では他に用例を知らないけれども、あの部分は「季経が……無礼な言動に出る」と解することもできるやうだからである（それにしても、まだすっきりしない感じは残るが）。この点、峯岸博士にお詫びした上、改めて諸賢の御教示を待つ次第である。古典大系においても、久松博士の御校閲を経て、「平凡」・「無礼」の両解を挙げておいた。

(六) 久松博士の新著『中世和歌史』も、当面の良経評についての論述は、アテネ文庫『新古今集』や『中世和歌史論』と同一である。

―昭和三十六年九月―